

宇波ヨシノヤ中世墓群

能越自動車道七尾氷見道路整備事業に伴う発掘調査報告

能越自動車道七尾氷見道路整備事業に伴う発掘調査報告

2014年3月

2014年3月

氷見市教育委員会

宇波ヨシノヤ中世墓群

能越自動車道七尾氷見道路整備事業に伴う発掘調査報告

2014年3月

氷見市教育委員会

序

東に富山湾を隔てた靈峰立山を仰ぐ氷見市は、古くから海の幸、山の幸に恵まれ、人々の生活の場として、数多くの文化遺産を生み育んできました。郷土に残る文化財は先祖より受け継がれてきたものであり、私たちはあらためてその歴史的、文化的価値を再認識しながら、末永く子孫に引き継いでゆかねばなりません。

氷見市内では、富山県北西部及び能登地域と三大都市圏との交流を深め、沿線地域の産業、経済、文化の発展等を目指す能越自動車道の整備が進められています。その建設にあたっては、これまで市内の各地で新たな遺跡が発見され、大規模な発掘調査が実施されてきました。平成19年には氷見IC、続いて平成21年には氷見北ICが開通し、このたび発掘調査の対象となった宇波地区では、平成24年3月に灘浦ICの供用が開始されました。現在、宇波地区では、灘浦IC以北、石川県との県境に向かう路線の工事が進められています。

今回、調査対象となった宇波ヨシノヤ中世墓群は、能越自動車道の工事に伴う測量作業の最中に新たに発見された遺跡です。発掘調査では、多数の石造物や珠洲焼が出土したほか、小石を敷き詰めた集石造構の下から火葬骨を納めた円形石組造構が確認されるなど、興味深い調査成果を残すことができました。これら調査の成果を、宇波地区、ひいては氷見地域の歴史に思いを馳せる手がかりとしていただければ幸いです。

おわりに、発掘調査にあたりましては、関係者の皆様をはじめ、多くの方々にご指導、ご協力を賜りました。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

氷見市教育委員会

教育長 前辻 秋男

例　　言

- 1 本書は、平成25年度に実施した富山県氷見市宇波地内に所在する宇波ヨシノヤ中世墓群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、能越自動車道七尾氷見道路（氷見市内）整備事業に先立ち、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の依頼を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社イビソクが担当した。
- 4 調査は、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所からの委託金で実施した。
- 5 調査面積は29m²である。
- 6 調査期間は、平成25年7月8日より平成25年8月29日（実働36日）である。
- 7 調査事務局は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課に置いた。事務担当者は次のとおりである。
課長：坂本研資、副主幹：大野　究、文化総括担当：布尾　誠、主任学芸員：廣瀬直樹
- 8 発掘調査担当者は次のとおりである。
- 監督員　氷見市教育委員会 生涯学習・スポーツ課　廣瀬直樹
管理技術者　日聖祐輔
調査員　日聖祐輔
- 9 整理作業は、平成25年12月18日より平成26年2月20日（実働40日）である。
- 10 本書は、第1・2章を廣瀬直樹（氷見市教育委員会）、第4章を日紫喜勝重（株イビソク）、第3・6章を日聖祐輔（株イビソク）が執筆し、編集は日聖が行った。
- 11 自然科学分析は株パレオ・ラボに依頼し、その成果を第5章に掲載した。
- 12 出土遺物と調査に関わる資料は、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課が保管している。
- 13 遺跡の略号は「UNY」とした。
- 14 調査参加者は次のとおりである。

発掘作業員：田中一成、橋貞夫、田組源生、遠藤幸雄、向修誠

（社団法人　氷見市シルバー人材センター）

整理作業員：太田美奈、可児多津子、河合聖子、坂下かおり、清水美智子、下田真由美、

高橋智子、二村久美子、広瀬みどり、三島淳子、山下敦子、吉居陽子

（株イビソク）

- 15 調査・本書作成にあたり、下記の機関から多大なご教示・ご協力を得た。記して感謝申し上げる。

株式会社エイ・テック　　国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所　　竹沢建設株式会社
富山県教育委員会生涯学習・文化財室　　富山県埋蔵文化財センター　　氷見市立博物館
小境卓治（氷見市立博物館）

目 次

第1章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境.....	1
第2節 遺跡の歴史的環境.....	1
第2章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯.....	3
第2節 調査の経過.....	4
第3章 調査の成果	
第1節 調査区概要.....	5
第2節 1区検出遺構.....	5
第3節 2区検出遺構.....	9
第4章 遺物	
第1節 遺物の概要.....	12
第2節 出土遺物.....	12
1. 珠洲焼.....	12
2. 須恵器.....	12
3. 土師皿.....	12
4. 鉄製品.....	12
5. 石製品.....	14
第5章 自然科学分析	
第1節 S Z 3出土人骨の放射性炭素年代測定.....	16
第2節 S Z 3出土人骨の同定.....	18
第6章 まとめ.....	20
<写真図版>	
<報告書抄録>	

図版目次

- | | |
|---------------------------------|----------------------------|
| 第1図 周辺の遺跡 (1/60,000) | 第9図 1区SZ1断面図 (1/40) |
| 第2図 作業状況1 | 第10図 1区SZ3人骨出土状況平面図 (1/20) |
| 第3図 作業状況2 | 第11図 2区SX4平面・断面図 (1/20) |
| 第4図 調査区平面図 (1/100) | 第12図 出土遺物1 (1/3, 1/2) |
| 第5図 1区調査区東西断面図 (1/20) | 第13図 出土遺物2 (1/8) |
| 第6図 1区円礫層検出状況平面図 (1/20) | 第14図 試料としたヒト肋骨 |
| 第7図 1区SZ1～3検出状況平面図 (1/20) | 第15図 暗年較正結果 |
| 第8図 1区SZ1～3外縁石検出状況平面図
(1/20) | 第16図 SZ3出土人骨 |

表目次

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 第1表 遺物観察表 (土器・陶器) | 第4表 測定試料および処理 |
| 第2表 遺物観察表 (鉄製品) | 第5表 放射性炭素年代測定および暗年較正の結果 |
| 第3表 遺物観察表 (石製品) | |

写真図版目次

- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 写真図版1 | 4. 1区SZ3人骨出土状況 |
| 1. 調査前状況 | 5. 1区SZ3断面状況 |
| 2. 1区2トレンチ断面 | 6. 1区SZ3完掘状況 |
| 3. 1区板碑出土状況 | 7. 1区SZ1～3完掘状況 |
| 4. 1区遺物出土状況 | 写真図版5 |
| 5. 1区遺物出土状況 | 1. 2区SX4検出状況 |
| 写真図版2 | 2. 2区SX4遺物出土状況 (空風輪) |
| 1. 1区円礫層検出状況 | 3. 2区SX4遺物出土状況 (空風輪) |
| 2. 1区円礫層遺物出土状況 | 4. 2区SX4半裁状況 |
| 3. 1区円礫層遺物出土状況 | 5. 2区SX4遺物出土状況 (火・水・地輪) |
| 4. 作業状況 | 6. 2区SX4遺物出土状況 (火輪) |
| 5. 作業状況 | 7. 2区SX4遺物出土状況 (空風輪) |
| 写真図版3 | 8. 2区SX4断面 |
| 1. 1区SZ1円礫層半裁状況 | 写真図版6 |
| 2. 1区SZ1半裁状況 | 出土遺物1 |
| 3. 1区SZ1遺物出土状況 | 写真図版7 |
| 4. 1区SZ1断面 | 出土遺物2 |
| 5. 1区SZ1～3検出状況 | 写真図版8 |
| 写真図版4 | 出土遺物3 |
| 1. 1区SZ1～3外縁石検出状況 | 写真図版9 |
| 2. 1区SZ2検出状況 | 出土遺物4 |
| 3. 1区SZ2完掘状況 | |

第1章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、能登半島の基部東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに旧太田村を除く氷見郡1町17村が合併し、現在の氷見市が成立した。面積は約230km²、人口は約5万1千人である。市域は、北・西・南の三方が標高300～500mの丘陵に取り囲まれ、東側約20kmの海岸線をもつて富山湾に面している。

灘浦地区は、宇波川、下田川などの小河川が流れる市の北部地域で、丘陵が海岸にせり出し、平野が比較的少ない地形である。県境を越えた北西、石川県鹿島郡中能登町には石動山(565m)がそびえる。

宇波ヨシノヤ中世墓群が所在する宇波地区は、宇波川の河口に位置する。宇波川沿いおよび海岸沿いに小平地が広がり、北・南・西方に丘陵山地が連なる。宇波川は、石川県鹿島郡中能登町の石動山の南斜面に発し、県境を越えて白川地区で五十谷川と合流、谷平野を経て宇波地区で海に入る長さ約9.5kmの二級河川である。

宇波ヨシノヤ中世墓群は、宇波地区的北西端に所在し、白川地区、戸津宮地区に隣接する。遺跡は、宇波川下流左岸の丘陵北東側の斜面標高25～19mに立地し、南西側には能越自動車道灘浦ICが整備されている。また、宇波ヨシノヤ中世墓群の全城が能越自動車道の建設予定地となっており、調査終了後には、隣接する熊野神社古墳群とともに、工事による削平が行われた。

第2節 遺跡の歴史的環境

灘浦地区は、丘陵が海岸にせり出しており、平野が比較的少ない地形であるが、縄文時代前期末から中期にかけて海岸部の平野や断崖に穿たれた海食洞の利用が始まっている。縄文時代の遺跡としては、大境洞窟遺跡（国指定史跡）や大境エンニヤマ下洞窟遺跡、泊洞窟遺跡などの洞窟遺跡、前期末に人々が渡った虹が島遺跡、海岸に面した丘陵裾部に営まれた中期後葉の中波貝塚がある。標高80～90mの台地上に位置する長坂貴船遺跡は、中期末葉の集落遺跡と考えられる。

弥生時代から古墳時代には海岸部周辺を中心に生活が営まれたと推測される。大境洞窟遺跡で弥生時代中期中葉から古墳時代後期の遺物が出土している。また、宇波川の流域を中心に古墳群や横穴群が分布しており、宇波ヨシノヤ中世墓群の立地する丘陵尾根には熊野神社古墳群、谷部を挟んだ南東側には宇波安居寺古墳群が所在する。

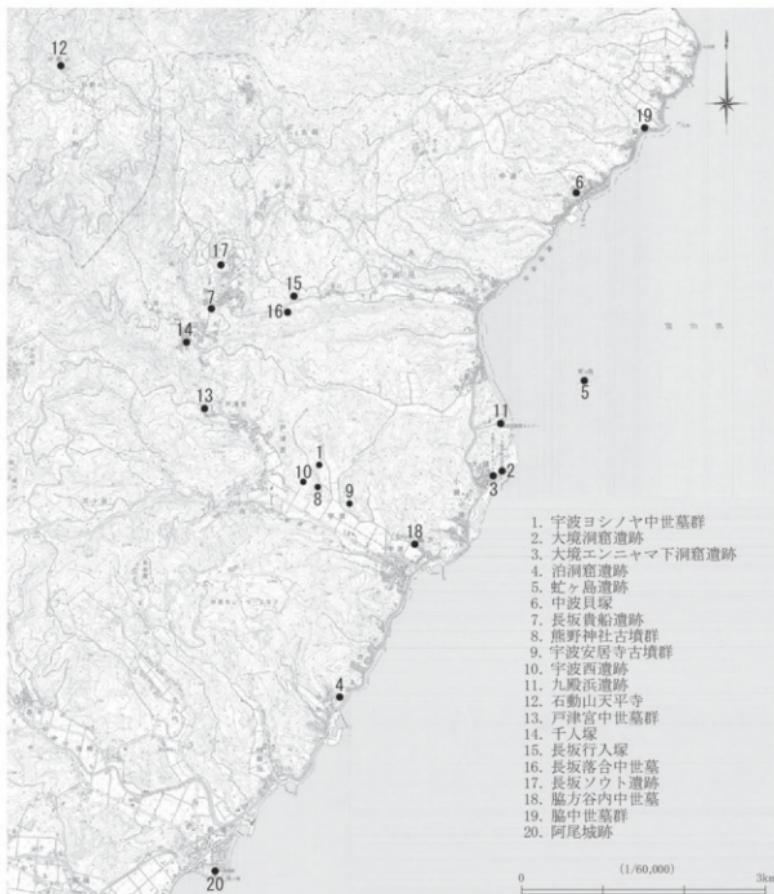
古代の遺跡としては、7世紀後半から8世紀の集落跡である宇波西遺跡、7世紀初めから8世紀初め頃まで製塙が営まれた九殿浜遺跡がある。

石動山に所在する石動山天平寺（石動寺）は、古代から修驗道で栄えた。最盛期の中世には360余りの院坊と衆徒3000人を擁したと伝えられる。政治的な影響力も強く、南北朝の動乱期だった建武2年（1335）と戦国期の天正10年（1582）の2回にわたって兵火に焼かれている。中世・近世の灘浦地区はこの石動山天平寺の強い影響を受けており、多数の遺跡が所在する。戸津宮中世墓群、千人塚、長坂行入塚、長坂落合中世墓、長坂ソウト遺跡、脇方谷内出中世墓、脇中世墓などの中世墓群や各所に集積された石造物なども石動山信仰に関連する可能性がある。なお、石動山への主な登山道は石動山七口といわれ、越中側には平沢口（平沢道・長坂道）、大窪口（大窪道・八代仙道）、角間口（角間道）の3つの登山道があった。その中でも、特に中世において越中側からの主参道となつたのが大窪道である。富山湾に面した阿尾城下を起点とし、白川地内を通って石動山へ到る古道で、石敷の道、道標、多数の石造物、寺坊跡などの伝承地が残る。

また、中世には、灘浦海岸一帯で産出される微粒砂岩「萩田石」を用いた石造物が多数製作されている。その分布は水見市内にとどまらず、射水、砺波、五箇山、黒部、立山などでも確認されている。

南北朝期の觀応の擾乱では、反幕府勢力であった桃井氏の拠点が越中にあったため、越中国内は動搖し、石動山やその山麓に位置する白川・宇波地区でもたびたび戦闘が行われた。そのため、周辺には白川地区的白河城跡や、宇波地区的宇波城跡など、南北朝期の山城が築かれている。

このほか、宇波地区と白川地区の境には奈賀礼社という神社があったというが、ほ場整備により現在は失われてしまっている。社殿はなく、境内にある石を神体としていたとされ、現在白川地区的橋鉢神社境内にある石造物は、奈賀礼社から移されたものだという。



第1図 周辺の遺跡

第2章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成24年12月6日、宇波地内において能越自動車道建設予定地で測量作業中の測量業者が、集石遺構および五輪塔を発見した。氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課学芸員へ、測量業者より直ちに連絡が入り、翌7日午前に測量業者が持参した図面および写真で位置確認を行った。その結果、発見された集石遺構は、当該地の周知の遺跡である熊野神社古墳群のさらに北側に所在する新規の遺跡であることが確認された。この時点で、富山県教育委員会生涯学習・文化財室へ遺跡発見の旨を連絡した。

同日午後、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の建設監督官、氷見市能越自動車道対策室職員、当該地区的建設業者現場代理人の立ち会いのもと、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課学芸員2名が現地の踏査を実施した。踏査では、方形で約2m四方の集石遺構1基を確認し、集石遺構から離れた地点で五輪塔空風輪1点を探集した。また、測量中に発見された五輪塔は、空風輪1点、火輪3点、水輪6点、地輪1点で、その他に板石塔婆ないし基礎石とみられる石材が1点あった。遺跡を発見した測量業者によると、発見された五輪塔は、重機による損壊が懸念されたため、すでに工事関係者によって別の場所へ集積、積み直しが行われたとのことであった。また氷見市教育委員会への連絡と同時に国土交通省への報告も行われており、次週より始まる予定だった表土掘削は中止の方向で調整が進められていた。

踏査にあたり、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の建設監督官と当該地区的建設業者現場代理人から経緯を聞いた。あわせて遺跡の不時発見の場合の対応について説明し、工事を中止したうえであらためて協議および現地調査の機会を持つことになった。

同日夕方、踏査および現地での協議結果を富山県教育委員会生涯学習・文化財室へ伝達し、今後、この件に関しては氷見市教育委員会が主体となって調整、調査を行うこととなった。その後、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所調査第二課と遺跡の扱いについて協議し、再度、現地踏査を実施することになった。また12月14日付けで、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所より、文化財保護法第97条第1項遺跡発見の通知の提出を受けた。遺跡の名称は、所在地周辺の通称地名「ヨシノヤ」から、「宇波ヨシノヤ中世墓（仮称）」とした。

平成24年12月18日午後、再び国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所の建設監督官と当該地区的建設業者現場代理人立ち会いのもと、氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課学芸員2名が2回目の現地踏査を実施した。踏査では、集石遺構の近くで五輪塔地輪1点を探集したほか、重機用に設けられた作業道付近で青磁、須恵器の破片を2点ずつ採集した。また、集石遺構の斜面上側にて、ややまばらではあるが新たな集石遺構の存在を確認した。

現地踏査で確認された遺構・遺物の分布状況から、集石遺構2基を含むおおよそ20m四方の範囲を保護対象地と判断した。この保護対象地については、工事着手前に本発掘調査が必要であることを立ち会いに伝え、その範囲についての現状保存を依頼した。また同日、積み直されていた五輪塔をすべて回収し、採集遺物とともに氷見市文化財センターへ搬入した。

平成25年1月7日には、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所調査第二課の担当者と氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課の学芸員に、富山県教育委員会生涯学習・文化財室の担当者を加えた三者で、本発掘調査に関する協議を実施した。協議の結果、保護対象地については、平成24年度中に事前調査を実施した上で、平成25年4月以降本発掘調査を実施することになった。事前調

査および本発掘調査の実施主体は氷見市教育委員会が担当し、調査費用は、事前調査は国庫補助事業、本発掘調査は国土交通省からの委託金で実施するものとした。また、集石遺構が複数確認されたことから、遺跡名を「宇波ヨシノヤ中世墓群」とあらため、埋蔵文化財包蔵地として追加の登録を行った。

第2節 調査の経過

(1) 平成24年度事前調査

平成25年度に計画された本発掘調査に先立ち、遺跡の範囲確認と現状把握を行うための測量調査を実施することになった。測量調査は、国庫補助事業として実施している埋蔵文化財発掘調査等事業の一環として、国庫の補助および県費の補助を受けて実施した。

測量調査は、保護対象地と判断した集石遺構2基を含む約400m²を対象とし、株式会社エイ・テックに委託して実施した。調査期間は、平成25年1月29日から同3月15日までである。

(2) 平成25年度本発掘調査

平成25年3月5日付けで、国土交通省北陸地方整備局富山河川国道事務所より発掘調査の依頼があった。それを受け、平成25年度当初の発掘調査実施を目標に本発掘調査の準備をすすめた。本発掘調査は、氷見市教育委員会が主体となり、株式会社イビソクに業務委託して実施することになった。

(3) 経過

- 6月13日 氷見市教育委員会、株イビソクで打ち合わせ。
- 7月8日 道具、資材搬入。基準点測量。
- 7月10日 表土掘削、トレチ掘削。
- 7月11日 2区、遺構掘削開始。
- 7月16日 1区、遺構掘削開始。
- 8月10日 2区、完掘写真撮影。
- 8月19日 1区、完掘写真撮影。
- 8月24日 完掘全景写真撮影。
- 8月26日 調査完了確認。
- 8月28日 道具、資材搬出。
- 8月29日 遺物搬出。現地最終確認。調査終了。



第2図 作業状況1



第3図 作業状況2

第3章 調査の成果

第1節 調査区概要

本調査区は標高25~30mの丘陵の斜面に位置する。周囲は植林や田畠の開墾時に造成されたとみられる平坦面が、段々畑状に広がっている。また、当該地の東側は谷地形となっているため、比較的見晴らしの良い立地である。

調査区は1区（上段）・2区（下段）の2か所にわかれる。いずれも調査前、地表面において遺物や礫が集中している箇所が確認でき、何らかの遺構が存在することが容易に予測できる状況であった。

1区

標高28~30m、高低差約2mを測る斜面に位置する。調査前現況で遺物（須恵器）や藪田石、角礫（10~50cm大）などが散布していた。表土中からは珠洲焼片や板碑などの遺物のほか、2~4cm大の小円礫、10~40cm大の円礫・角礫が散乱した状態で出土している。

表土掘削後、下層状況確認のためトレンチ掘削を2か所で行った。このうち2トレンチで調査区西端から1.5m、標高29.5m前後で平坦な地山面を確認した。この平坦面は南方向へ先細る形状で、面積としてはかなり狭小なものである。

また、トレンチの断面観察の結果、地山上には2~3層に分かれる黒褐色土が堆積していた。いずれの層も締りが弱く、西から東方向へ下る地形と合致した堆積を示していたため、自然堆積層と考えられる。

2区

標高25m前後、高低差約30cmを測る緩斜面に位置し、調査前現況で平面形が楕円形状の集石を1か所確認した。集石は東西長約2.2m、南北長約1.7mを測る。表面観察で、石の間に珠洲焼片や五輪塔などの遺物が確認できる状態であった。

第2節 1区 検出遺構

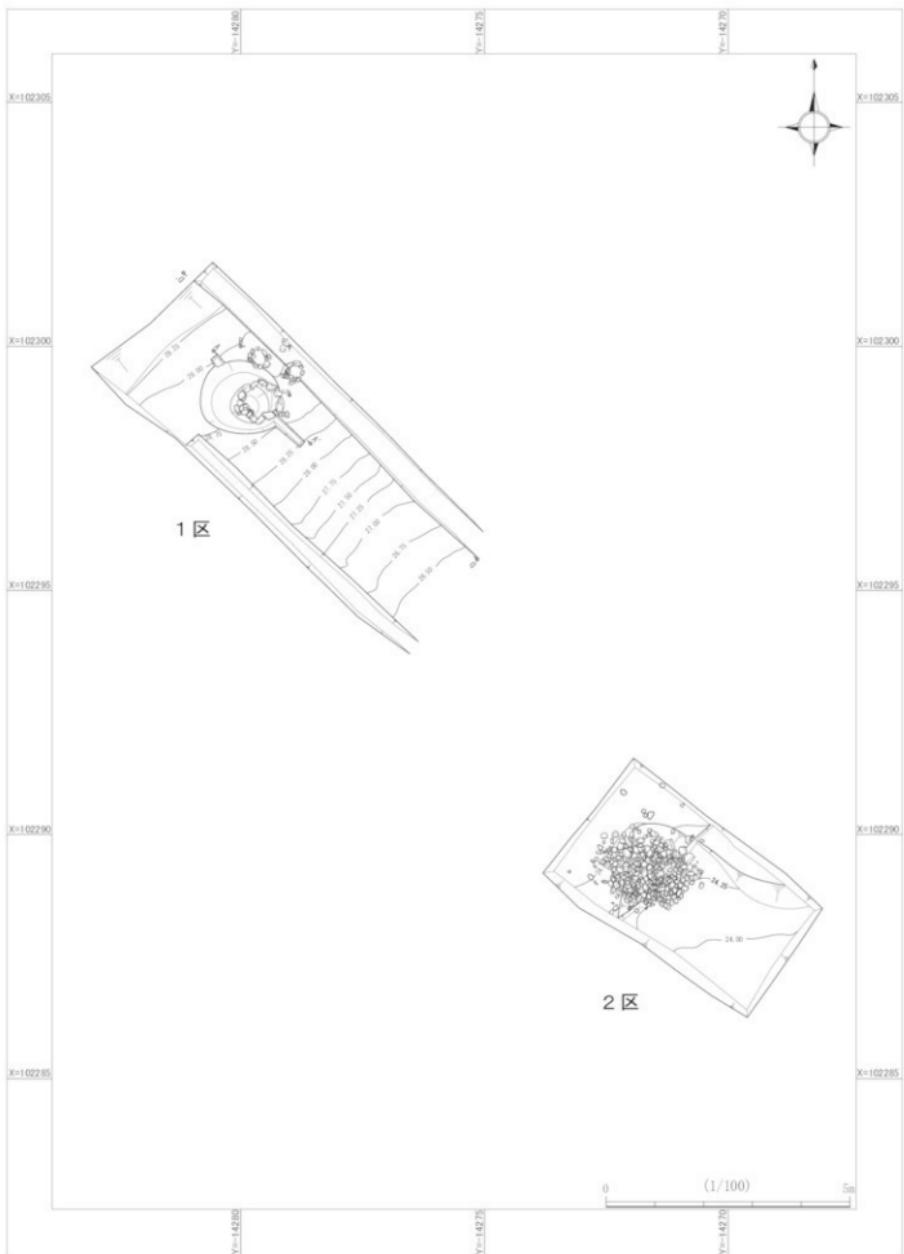
表土除去後、平坦面箇所で楕円形状に広がる小円礫群を検出した。小円礫は2~5cm大のものを中心とし、東西長約2.5m、南北長約2mの範囲に広がり、堆積厚は10~20cmを測る。東側の斜面で表土掘削中に見られた円礫もここから転落したもので、かなりの数量が含まれていたことからその範囲が広がる可能性も考えられる。円礫層中からは珠洲焼（第12図17）、土師器（第12図23・24）、染付、釘（第12図、26・27）などの遺物のほか、人骨片が出土している。

円礫層除去後、石材を円形に配石した円形石組遺構を3基検出した。それぞれにS Z 1~3の遺構番号を付し、調査を行った。

S Z 1

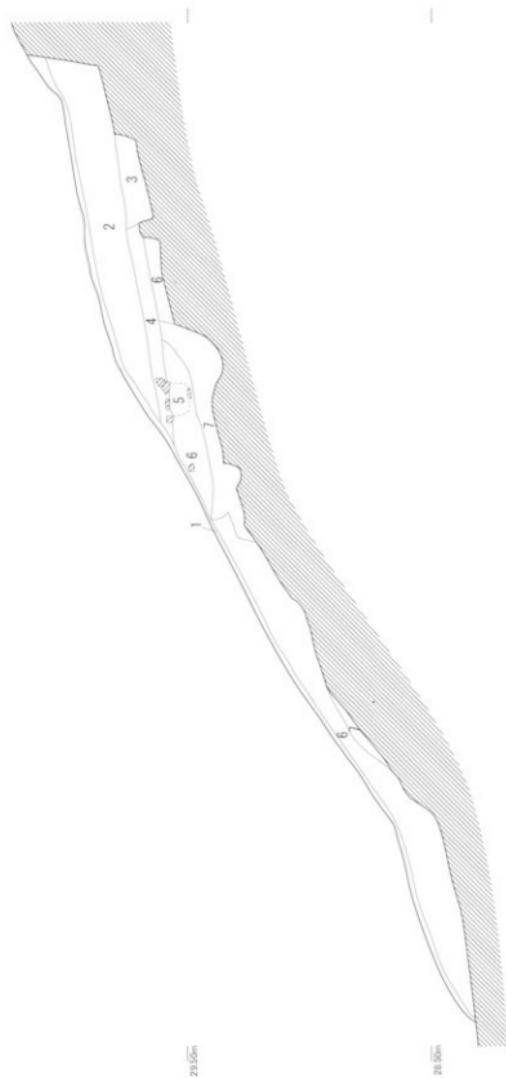
直径約1m、深さ約70cmを測り、3基の円形石組遺構の中で最も規模の大きなものである。地山を掘り込み、外縁に10~30cm大の角礫を円形に積み上げ、中央部には同規模の円礫・角礫を埋めている。内部の礫群は大きさや重なり方などに規則性は見られず、順次下層から積み上げたものと考えられる。

遺構底部から経筒や藏骨器等の出土が予測されたが、遺物は遺構上層位の埋土から鉄釘と、骨の細片が数点ずつ出土したのみである。これらの遺物は木棺や藏骨箱などを埋置した可能性をうかがわせるものだが、棺とみられるような木質遺物がみられなかったことや、棺等の木質遺物が朽ちたことに



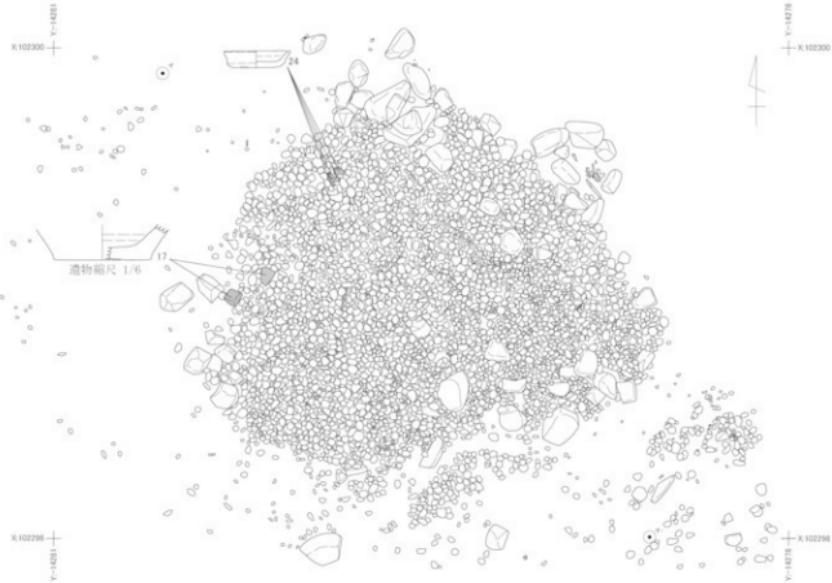
第4図 調査区平面図

D
30.5m

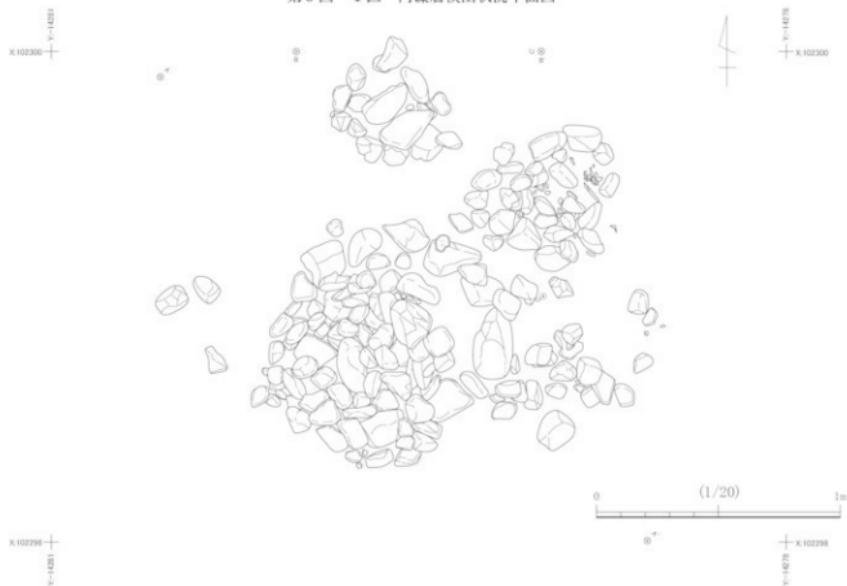


(1/20)
m

第5図 1区調査区東西断面図



第6図 1区 円礫層検出状況平面図



第7図 1区 SZ1 ~ 3 検出状況平面図

よる埋土の陥没状況は確認できなかった。

可能性として、後述する S Z 3 に埋葬された人骨や釘が S Z 1 に混入したか、分骨して埋葬したことがあげられる。

S Z 2

直径約50cm、高さ20cmを測る。10~20cm大の円礫・角礫を円形に配置し、中央部に20cm大の角礫が積まれていた。掘方や墓壙が確認できなかったため、遺構面に外縁石を並べ、その上部及び内部に石を積み上げた構造である。遺物の出土はなかった。

S Z 3

直径約60cm、高さ20cmを測り、平面形は梢円形状である。周囲に15~20cm大の円礫・角礫を円形に配置し、その上部及び内部に同様の礫を積み上げている。

外縁石より内部の石を除去後、厚さ約10cmで埋置された火葬骨が出土した。骨周囲の土壤には多量の炭化物が含まれていたが、埋土や礫に被熱の痕跡が見られなかったことから、別の場所で火葬したのち当該地に埋置したものである。骨の納め方には特に規則性は見いだせなかった。この骨は分析の結果、15歳以上の人骨で、性別は不明であった（第5章参照）。遺物は人骨のほか和釘が1点出土したのみで、蔵骨器等の痕跡は見られなかった。

また、本遺構では明確な墓壙は確認できなかったが、人骨片が外縁石の下層から出土していることから考えても、墓壙を掘削後、埋葬したものとみるべきだろう。

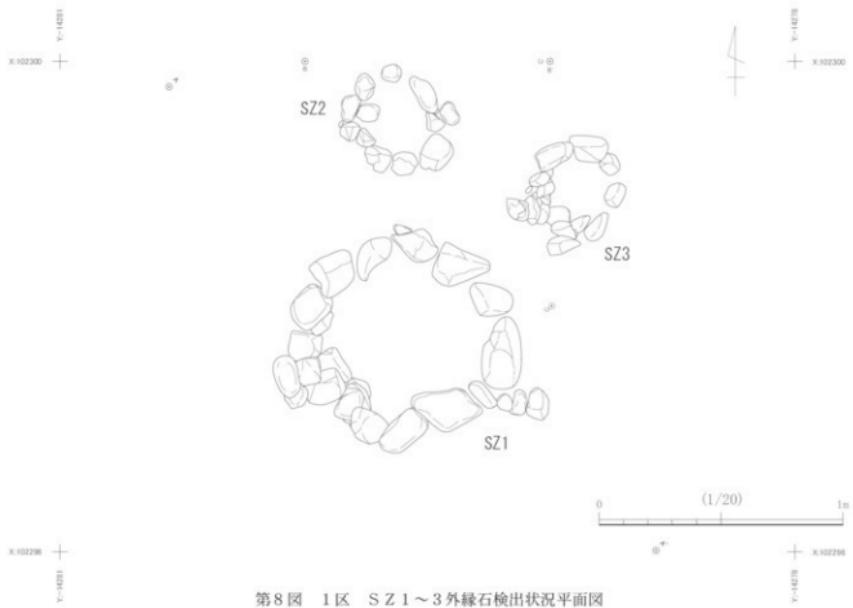
第3節 2区 検出遺構

2区では平面形が梢円形を呈する集石遺構（S X 4）を1基検出した。本遺構は東西長約2.2m、南北長約1.7m、石材堆積厚は40~50cmを測る。調査は遺構を南北方向に半裁し、石材を層位ごとに記録後、取り外す作業を繰り返し行った。

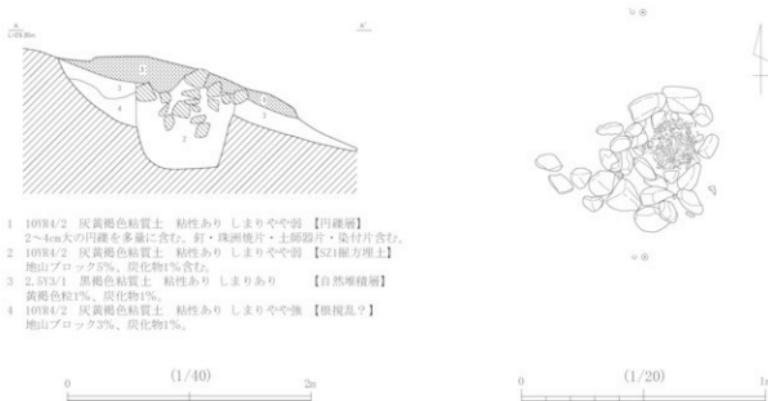
石材を順次取り外していくと、下層からも珠洲焼片などのほか、数個体分の五輪塔部材が出土した。五輪塔部材は空風・火・水・地輪の全てが確認できるが、各部材の石材や数量にはばらつきがみられる。最も多いのは水輪で7個を数える。いずれの石材も表面全体が摩滅しているため、梵字などの痕跡はみられず、かろうじて成形痕が部分的に確認できる程度である。またこれら以外に当該地周辺では調査前、表探遺物として12個の五輪塔部材が採取されている。

石材の除去後、下層面の掘り下げを行うと同時に壁断面の観察を行った。結果、遺構下層に盛土層を確認した。この盛土層は締りが強い黄褐色粘質土を基本とし、層の直上からは中世～近世の陶磁器片に混じって昭和時代とみられる玩具や陶磁器片が出土した。遺物は面的に広がって出土していることから考えて、搅乱などによる混入ではなく本層が生活面として機能していたものとみられる。

このことから、本遺構は現代の整地以後、周辺に散布していた石材や五輪塔、珠洲焼片等の遺物を寄せ集めたもの（遺構）と考えられる。さらに、2区は1区とほぼ直線的な位置関係であることから、積み上げられた石材や遺物は1区の遺構（S Z 1~3）に伴うものかもしれない。

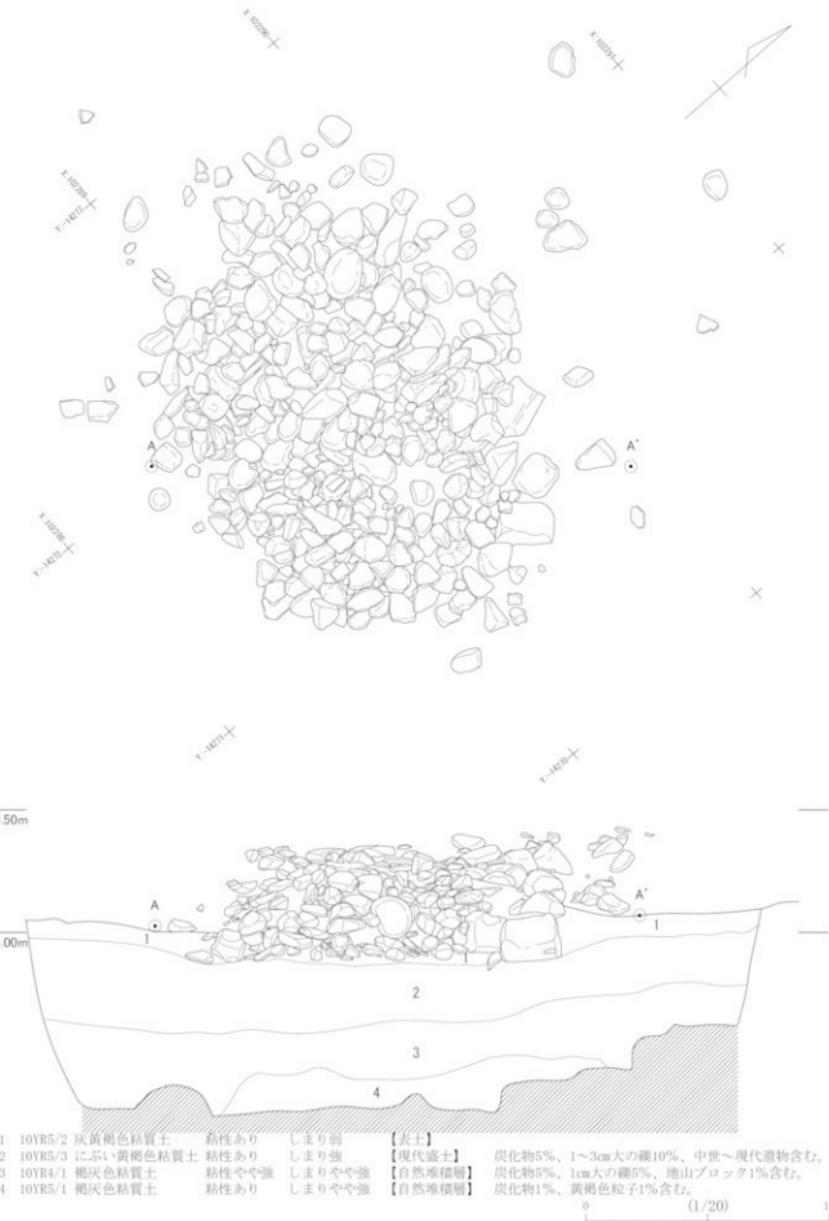


第8図 1区 SZ 1~3 外縁石検出状況平面図



第9図 1区 SZ 1断面図

第10図 1区 SZ 3人骨出土状況平面図



第11図 2区 SX 4 平面・断面図

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

宇波ヨシノヤ中世墓群からは古代から近現代に至る遺物が出土した。大半は2区S X 4から出土したもので、主な遺物は珠洲焼と五輪塔であった。遺物の器形については、破片資料が多数を占めるところから判断は困難であるが、可能な限り記述することとする。

第2節 出土遺物

1. 珠洲焼

1は壺の口縁部である。5は口縁先端を屈折させ、円頭状に仕上げ、頸基部からやや下がった位置には一部タタキ目が見られる。焼成は瓦質のような仕上がりである。2～5は壺の口縁部である。2はなだらかに外傾する口縁端部をつまんで突出させる。器体外面にはタタキ目、内面はナデ調整が見られる。3はなだらかに外傾する口縁端部内面で面を取る。4はほぼ垂直に立ち上がった端部を水平に面取りし、外反ぎみにナデ調整を行う。5は回転ナデ成形し、ほぼ垂直に立ち上がった端部をつまんで嘴状に突出させる。肩部外面は素文で、口縁部内面は綫方向に荒い刷毛状工具によるナデツケ痕が見られる。肩部内面は当て具痕が見られる。6～9は壺の肩部である。外面にはタタキ目、内面には当て具痕が見られる。10～14は壺の胴部である。外面にはタタキ目、内面には当て具痕が見られる。15～17は壺の底部である。回転ナデ成形し、底部は糸切後、不規則な木目状圧痕調整が見られる。内面は未調整である。

2. 須恵器

18は甕の胴部である。内面には同心円状の当て具痕が見られる。外面には斜方向のタタキとカキメ調整を施す。19は杯の口縁部である。回転ナデ成形を施す。20は無高台杯の底部である。回転ナデ成形し、底部は回転ヘラ切り後、未調整である。焼成は瓦質のような仕上がりである。21は杯の底部である。回転ナデ成形し、内端接地する高台を貼り付ける。22は碗の底部である。回転ナデ成形し、底部外面はヘラケズリ調整が見られる。外端接地する輪高台を貼り付ける。

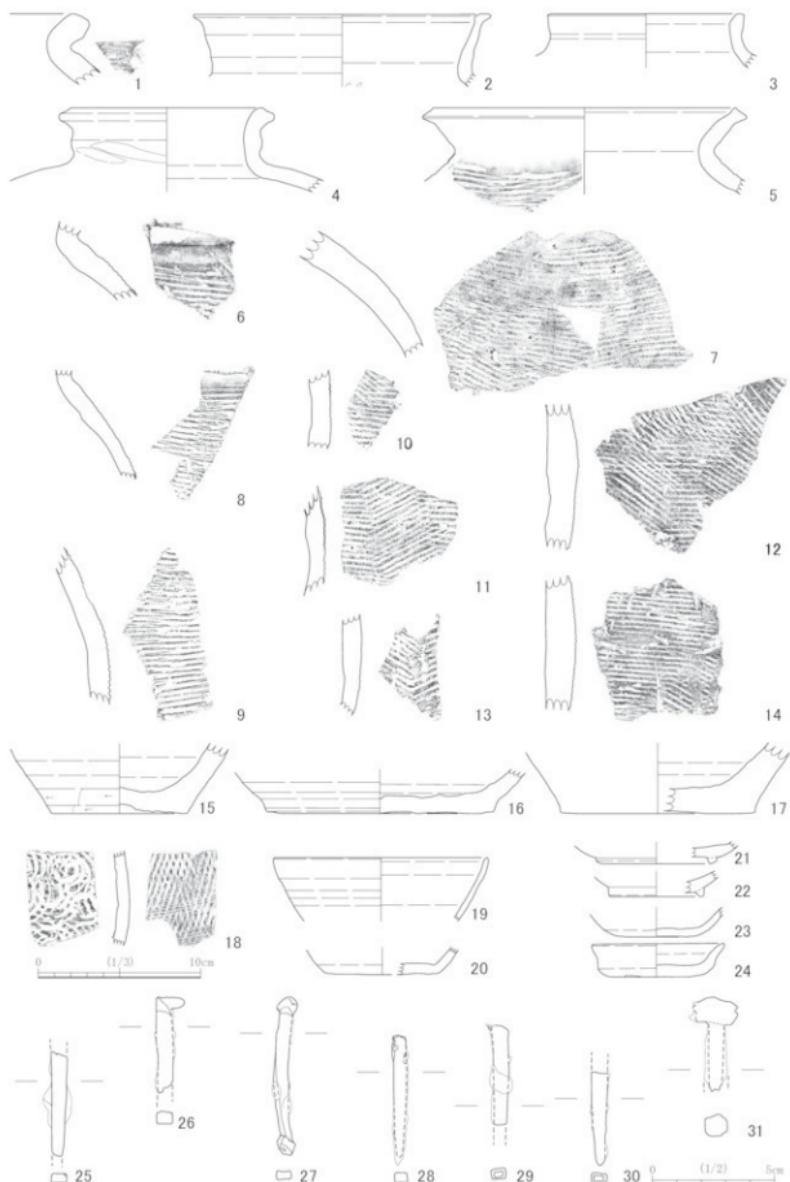
3. 土師皿

23・24は土師皿である。回転ナデ成形し、底部は回転糸切り後、ユビオサエ調整が見られる。器高は高くない。23は底部のみ残存する。在地産と思われる。

4. 鉄製品

25～31は鉄釘である。26は断面が長方形を呈し、上部は欠損する。27・28は断面が長方形を呈し、頭部は折れ曲っている。

29は断面が長方形を呈し、頭部、先端部とも残存し、保存状態は良好である。30は断面が長方形を呈し、先端部は欠損する。31は断面が長方形を呈し、上部は欠損する。32は断面が方形を呈し、上部、端部とも欠損する。

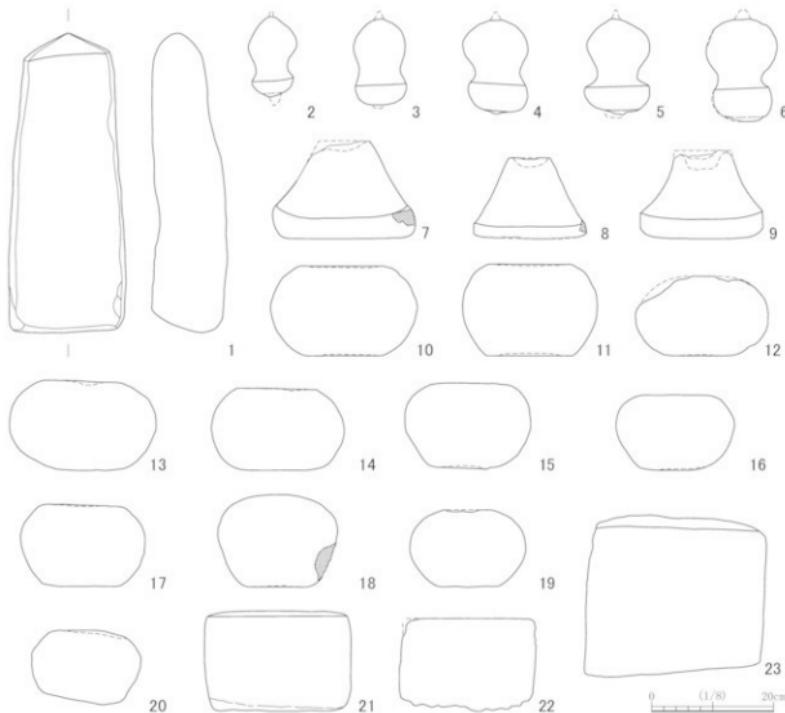


第12図 出土遺物 1

5. 石製品

今回出土した石製品の石材は砂岩である。主体をなすのはいわゆる「菱田石」であり、ほかに粗粒砂岩（8・9・11・13・17・19・20・22・23）を用いたものもみられる。

1は板碑である。頭部は山形に成形する。風化が著しいが、部分的に整調整が見られる。
 2～23は五輪塔である。2～6は空風輪である。空輪と風輪を結合したもので、間にはくびれを持たせ部位の境を作り出す。風化が著しいが、部分的に整調整が見られる。7～9は、火輪である。7は風化が著しく調整は不明である。8・9は、全体的に整調整が見られ、上部には空風輪を挿入する孔を有する。10～20は水輪である。風化が著しいが、部分的に整調整が見られる。21～23は地輪である。風化が著しいが、部分的に整調整が見られる。



第13図 出土遺物 2

第1表 遺物観察表（土器・陶器）

回収番号	遺構	器種	器形	部位	法量(cm)			調整等の特徴	地成	胎土	色調	備考
					柱径	器高	底径					
1	2DSX4西半5層	珠洲焼	甕	口縁部	—	(4.0)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	やや不良	泥	灰黄	珠洲焼 IV層
2	2区表探	珠洲焼	甕	口縁部～肩部	(18.0)	(5.3)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰白	珠洲焼 II層
3	1DC3層	珠洲焼	甕	口縁部	(18.0)	(4.5)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰白	珠洲焼 IV層
4	2DSX4東半1層	珠洲焼	甕	口縁部	(6.0)	(3.0)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	珠洲焼
5	2DSX4東半4層	珠洲焼	甕	口縁部～肩部	(11.8)	(5.2)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	珠洲焼 II層
6	2DSX4南半6層	珠洲焼	甕	肩部	—	(4.8)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰黄	珠洲焼
7	2DSX4南半2層	珠洲焼	甕	肩部	—	(7.7)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰	珠洲焼
8	2DSX4東半3層	珠洲焼	甕	肩部	—	(6.7)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰黃灰	珠洲焼
9	1DC3層	珠洲焼	甕	肩部	—	(9.6)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰	珠洲焼
10	2区表探	珠洲焼	甕	肩部	—	(2.0)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰	珠洲焼
11	2DSX4北半2層	珠洲焼	甕	肩部	—	(6.7)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰黄	珠洲焼
12	2DSX4東半3層	珠洲焼	甕	肩部	—	(9.0)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰	珠洲焼
13	2DSX4南半4層	珠洲焼	甕	肩部	—	(3.6)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰黃灰	珠洲焼
14	2DSX4南半3層	珠洲焼	甕	肩部	—	(6.7)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：あて具痕	良	泥	灰	珠洲焼
15	1E1.1+1r地出土	珠洲焼	甕	底部	—	(4.2)	(0.8)	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰黄	珠洲焼
16	2DSX4東半5・6層	珠洲焼	甕	底部	—	(2.0)	(1.0)	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	珠洲焼
17	1区4層	珠洲焼	甕	底部	—	(4.0)	(12.0)	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	珠洲焼
18	1区1層	須恵器	甕	肩部	—	(5.8)	—	外：ロクロナデ後タキ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	8世紀後半
19	2区表探	須恵器	杯	口縁部～全体	(13.0)	(3.9)	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	須恵器
20	1区1層	須恵器	杯	底部	—	(1.7)	(0.8)	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	やや不良	泥	浅黄	8世紀後半
21	表探	須恵器	杯	底部	—	(1.4)	(0.6)	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	8世紀後半
22	表探	須恵器	甕	底部	—	(1.5)	(5.5)	外：ロクロナデ後タキアリ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	須恵器
23	1DSZ1円礎鉢	土師器	甕	底部	—	(1.0)	4.2	外：ナダ 内：ナダ	良	泥	灰	須恵器
24	1DSZ1円礎鉢	土師器	甕	半完形	8.0	2.1	4.2	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	良	泥	灰	15世紀代

第2表 遺物観察表（鉄製品）

回収番号	遺構	器種	材質	部位	法量(cm)			調整等の特徴	備考		
					長さ	幅	厚さ				
25	1DSZ1北半5層	釣	鉄	下部	(4.0)	(1.2)	(0.4)	鉗造			
26	1DC3層	釣	鉄	面縁～上部	(2.9)	(1.0)	0.5	鉗造・頭部折曲			
27	1DC6層	釣	鉄	面縁～上部	6.5	0.6	0.4	鉗造			
28	1ECSZ1南半5層	釣	鉄	面縁～上部	5.3	0.6	0.4	鉗造			
29	1ECSZ1北半4層	釣	鉄	面縁～上部	(4.1)	(0.6)	(0.5)	鉗造			
30	1DSZ23	釣	鉄	上部～上部	(3.7)	(0.6)	(0.4)	鉗造			
31	1DSZ23	釣	鉄	上部～下部	(3.9)	(0.9)	(0.9)	鉗造			

第3表 遺物観察表（石製品）

回収番号	遺構	器種	材質	部位	法量(cm)			調整等の特徴	備考			
					長さ	幅	厚さ					
1	1DC3層	板調	戴田石	腹身部	49.0	19.2	11.9	—				
2	表探	五輪塔	滑身	戴田石	空螺旋	12.5	8.0	—	鉗造			
3	2DSX4南半7層	五輪塔	滑身	戴田石	空螺旋	14.1	8.7	—	鉗造			
4	2DSX4東半3層	五輪塔	滑身	戴田石	空螺旋	15.3	10.7	—	鉗造			
5	2DSX4東半3層	五輪塔	滑身	戴田石	空螺旋	15.8	10.7	—	鉗造			
6	表探	五輪塔	滑身	戴田石	空螺旋	16.0	11.7	—	鉗造			
7	2DSX4東半4層	五輪塔	滑身	戴田石	火輪	15.9	23.4	—	鉗造			
8	2DSX4東半5層	五輪塔	滑身	粗粒砂岩	火輪	13.3	18.5	—	鉗造 上部有孔			
9	表探	五輪塔	滑身	粗粒砂岩	火輪	14.5	20.0	—	鉗造 上部有孔			
10	2DSX4東半4層	五輪塔	滑身	戴田石	水輪	14.7	24.0	—	鉗造			
11	2DSX4東半4層	五輪塔	滑身	戴田石	水輪	15.0	22.0	—	鉗造			
12	表探	五輪塔	滑身	戴田石	水輪	13.0	21.7	—	鉗造			
13	2DSX4東半5層	五輪塔	滑身	粗粒砂岩	水輪	14.8	24.0	—	鉗造			
14	表探	五輪塔	滑身	戴田石	水輪	13.4	21.7	—	鉗造			
15	表探	五輪塔	滑身	戴田石	水輪	14.0	20.5	—	鉗造			
16	2DSX4西半3層	五輪塔	滑身	戴田石	水輪	12.8	19.3	—	鉗造			
17	2DSX4東半5層	五輪塔	滑身	粗粒砂岩	水輪	13.7	20.3	—	鉗造			
18	2DSX4東半2層	五輪塔	滑身	戴田石	水輪	15.1	19.7	—	鉗造			
19	表探	五輪塔	滑身	粗粒砂岩	水輪	18.8	12.7	—	鉗造			
20	2DSX4西半5層	五輪塔	滑身	粗粒砂岩	水輪	11.8	17.4	—	鉗造			
21	2DSX4西半7層	五輪塔	滑身	戴田石	地輪	15.2	21.0	—	鉗造			
22	表探	五輪塔	滑身	粗粒砂岩	地輪	27.0	29.5	—	鉗造			
23	表探	五輪塔	滑身	戴田石	地輪	16.5	24.0	—	鉗造			

第5章 自然科学分析

第1節 S Z 3 出土人骨の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1.はじめに

富山県氷見市に位置する宇波ヨシノヤ中世墓群の円形石組造構S Z 3より出土した人骨について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ人骨について、別項目で同定が行われている（第5章第2節参照）。

2. 試料と方法

試料は、円形石組造構S Z 3から出土した人骨の肋骨（PLD-26069）である。肋骨をはじめ人骨は、白色になるまで良く焼けており、コラーゲンの抽出が望めなかったため、骨を構成する無機質に含まれる炭酸塩を測定の対象とした。焼骨を、Lantingほか（2001）の方法に従って、1.5%の次亜塩素酸ナトリウム溶液と1Mの酢酸で洗浄した後、リン酸との反応でCO₂ガス化した。CO₂ガスを精製後、水素還元によりグラファイト化した。測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

第4表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-26069	遺構：S Z 3 (2tr 内石組内) 遺物No. 53 その他：2013.07.25	種類：人骨（焼骨） 部位：肋骨（左右不明） 状態：dry	超音波洗浄 次亜塩素酸ナトリウム溶液洗浄（1.5%） 酢酸洗浄（1M） サルフィックス処理



第14図 試料としたヒト肋骨

3. 結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第15図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記

載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

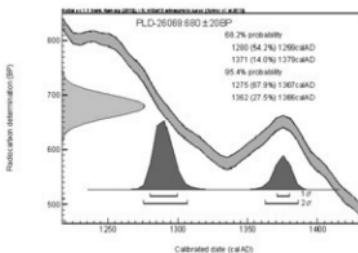
なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1 (較正曲線データ : IntCal13) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD-26069	-24.20 ± 0.34	680 ± 20	680 ± 20	1280AD(54.2%)1299AD 1371AD(14.0%)1379AD	1275AD(67.9%)1307AD 1362AD(27.5%)1386AD



第15図 暦年較正結果

4. 考察

試料について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。

S Z 3 から採取された人骨 (PLD-23242) は、 ^{14}C 年代が 680 ± 20 yr BP、 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) が1275-1307 cal AD (67.9%) および1362-1386 cal AD (27.5%) であった。これは13世紀後半～14世紀後半で、鎌倉～室町時代に相当する。なお、骨の炭酸塩は生前にゆっくりではあるが一定の速度で置換するため、炭酸塩は10～20年程度の期間に体内に取り込まれた炭素を含む。したがって、焼骨の ^{14}C 年代は死亡する10～20年程度前から死亡時までの期間の平均と考えられる。死亡時までの平均である点を考慮しても、S Z 3 人骨の死亡時期は13世紀後半～14世紀後半と考えて問題ないだろう。

第2節 S Z 3 出土人骨の同定

中村賢太郎（バレオ・ラボ）

1.はじめに

宇波ヨシノヤ中世墓群は富山県氷見市宇波地内に所在する。発掘調査で検出された円形石組造構S Z 3から出土した人骨について報告する。なお、同じ人骨の肋骨を試料として放射性炭素年代測定を行っており、13世紀後半～14世紀後半の年代が得られている（第5章第1節参照）。

2. 試料と方法

試料は、円形石組造構S Z 3から出土した人骨である。部位が同定できる破片を選別し、肉眼で観察し、同定結果と特徴を記載した。

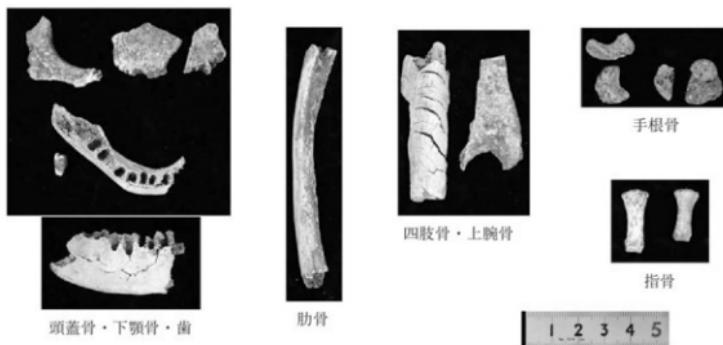
3. 結 果

人骨はいずれも焼けており、色調が白色～灰白色～灰色で、破片化していた。収縮による亀裂が見られる破片が多く見られた。

同定された部位は、頭蓋骨破片多数、下頸骨破片3点、逆離歯（前臼歯？）1点、肋骨破片多数、左右不明の上腕骨破片1点、長骨（四肢骨）破片多数、手根骨6点（左右の舟状骨、左右の月状骨、左小菱形骨、右有頭骨）、指骨（手、足）11点である。頭部、胸部、上肢、下肢が確認されたため、ほぼ全身が揃っていると考えて良いだろう。

残りの良い下頸骨の下顎体破片について観察所見を記す。右の下顎体から吻部にかけての破片である。小型できやしゃに見える。歯は全て脱落していた。歯槽は、左が内側切歯、外側切歯、右が内側切歯、外側切歯、犬歯、第1前臼歯、第2前臼歯、第1後臼歯を確認できた。それ以外の歯槽は破損により確認できなかった。

また、指骨は骨端が癒合していた。



第16図 S Z 3 出土人骨

4. 考 察

ほとんどの人骨片は、色調が灰色～灰白色～白色になっており、収縮による亀裂が見られる点から、軟質部が付着する新鮮なうちに高温の熱にさらされ焼けたと考えられる。つまり、ヒトの遺体が火葬されたと考えられる。

年齢について記すと、下顎骨の歯槽から考えられる歯の萌出状況から12歳以上と推定される。また、手足の指骨骨端は15歳前後で癒合する（Krogman, 1962）ため、年齢は15歳前後より上と推定される。まとめると、年齢は15歳前後より上だろう。

性別は不明である。

引用・参考文献

第1節

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- Lanting, J. N., Aerts-Bijjima, A. T. and van der Plicht (2001) Dating of Cremated Bones. *Radiocarbon*, 43(2A), 249-254.
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C年代」：3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

第2節

馬場悠男編（1999）考古学と人類学. 191p, 同成社.

Krogman, W. M. (1962) The Human Skeleton in Forensic Medicine. Springfield, Charles C. Thomas.

第6章　まとめ

1区では狭小な平坦面に構築された中世墓（S Z 1～3）を検出した。この遺構は円形石組遺構を3基配置したのち、小円礎を墳丘状に盛った構造であった。

これら3基の円形石組遺構のうち、S Z 3からは火葬人骨が出土したが、他の2基の遺構からは性格をうかがわせる遺物は出土していない。特にS Z 1は地下墓壙を持ち、直径1m、深さ70cmを測る規模の大きなものであるが、外縁石より内部には礎が多量に埋められており、遺物も混入品とみられる骨片や釘が出土したのみである。

S Z 3から出土した火葬人骨は分析の結果、15歳以上の性別不明のもので、ほぼ全身の骨が埋葬されていることが分かった。蔵骨器は持たず、墓壙を掘削後、骨のみを埋葬したものである。また、骨の一部を使用した放射性炭素年代測定では13世紀後半～14世紀後半の年代が得られている。

これらの遺構について、S Z 1・2は人骨を納めたS Z 3と位置が近接していること、S Z 1～3全体を小円礎で覆い被せている状況からみて、いずれも墓壙と考えられ、なおかつ近親者を弔ったものであろう。

ただし、S Z 1～3の構築順序や追葬の痕跡などは確認できなかつたため、構築時期に差があるのかは不明である。

構築年代についてはS Z 3出土人骨の年代測定結果以外に示す遺物は少ないが、円礎層中から14世紀後半～15世紀前半頃の土師皿と珠洲焼窯の破片が出土している。人骨の年代に比してやや後出する感があるが、これらを考え合わせて14世紀後半頃の年代を想定しておきたい。

2区で検出した集石遺構・S X 4は調査の結果、周辺に散在していた石材・五輪塔・陶磁器片などの遺物を、昭和時代頃に寄せ集めたものであることがわかった。遺物や石材は田畠の開墾や植林の際に削平・破壊された遺構から散在したものと推定される。S X 4の造作時期は当該地に植わる植林木の年輪から見て1950～60年以前ではないだろうか。

出土遺物のほとんどは珠洲焼窯であり、13世紀～15世紀代のものである。このほか板碑や五輪塔などの石造物も形式的に古い要素がみられず、15世紀以降のものである。

位置関係からみて1区と2区はほぼ直線的な位置にあることから、集石内にみられる遺物には上段方向から崩落したものが含まれる可能性がある。しかし、火輪が10個体分、石材の組み合わせから考えるとそれ以上の五輪塔数が想定されることから、1区検出遺構以外に複数の中世墓が周辺に存在したとみるべきだろう。

第1章でも述べた通り、当該地周辺には古墳や横穴墓、中世墓が多数存在しており、古墳時代から室町時代まで断続的に墓地として利用されていたことがわかる。

宇波地区近隣では、熊野神社古墳群や脇方十三塚古墳群で集石墓とみられる遺構が確認されているほか、脇方谷内出中世墓では斜面を掘り込んだ基壙に五輪塔や板碑を設置し、火葬骨を埋葬するなど、中世墓の造墓・埋葬方法にはいくつかの形式がみられる。今回検出した遺構は墓壙である円形石組遺構を配置したのち、小円礎を覆いかぶせる構造をもつものであった。残念ながら被葬者の身分や造墓に至る地域的、社会的背景まで明解することはできなかつたが、当遺跡近くを石動山の主要な登山道である大崖道が通ることから、石動山信仰との関わりも考慮すべきであろう。いずれにせよ、当該域の中世墓を考えるうえで、新たな一資料として提示できるものといえよう。

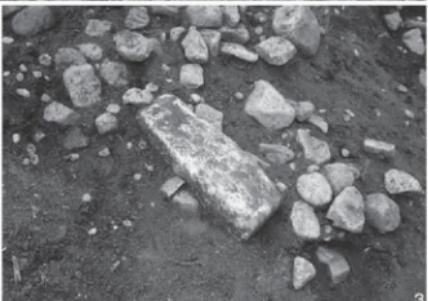
本遺構が単独で構築された墓なのか、集団墓の中の一つなのか、被葬者の身分や生活拠点との関連などについては今後の資料増加を待って再考したい。

引用・参考文献

- 大野 究2003『宇波地区の中世史』『図説 水見の歴史・民俗』郷土読本第15集 水見市教育委員会
- 水見市1999『水見市史』9資料編7自然環境
- 水見市2000『水見市史』6資料編4民俗、神社・寺院
- 水見市2002『水見市史』7資料編5考古
- 水見市教育委員会2000『脇方谷内出中世墓』水見市埋蔵文化財調査報告第31冊
- 水見市教育委員会2004『水見市埋蔵文化財分布調査報告(丘陵地区) IV』水見市埋蔵文化財調査報告第40冊
- 水見市教育委員会2009『千人塚』水見市埋蔵文化財調査報告第54冊
- 水見市教育委員会2014『水見市内発掘調査概報IV』水見市埋蔵文化財調査報告第63冊
- 財團法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1994
『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書(遺構編)』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第5集
- 財團法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 1996
『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告書(遺物編)』富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第7集
- 上市町教育委員会2005『富山県上市町黒川遺跡群発掘調査報告書』
- 吉岡康暢・平田天秋1976「珠洲古窯跡」『石川県珠洲市史』珠洲市史編さん委員会
- 木立雅朗ほか1988「能登」『北陸の古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会ほか
- 宇野隆夫ほか1988「越中」『北陸の古代土器研究の現状と課題』北陸古代土器研究会ほか
- 北陸中世土器研究会編1997『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』



2



3



4



5

1. 調査前状況

2. 1区2トレンチ断面

4. 1区遺物出土状況

3. 1区板碑出土状況

5. 1区遺物出土状況



1



2



3



4



5

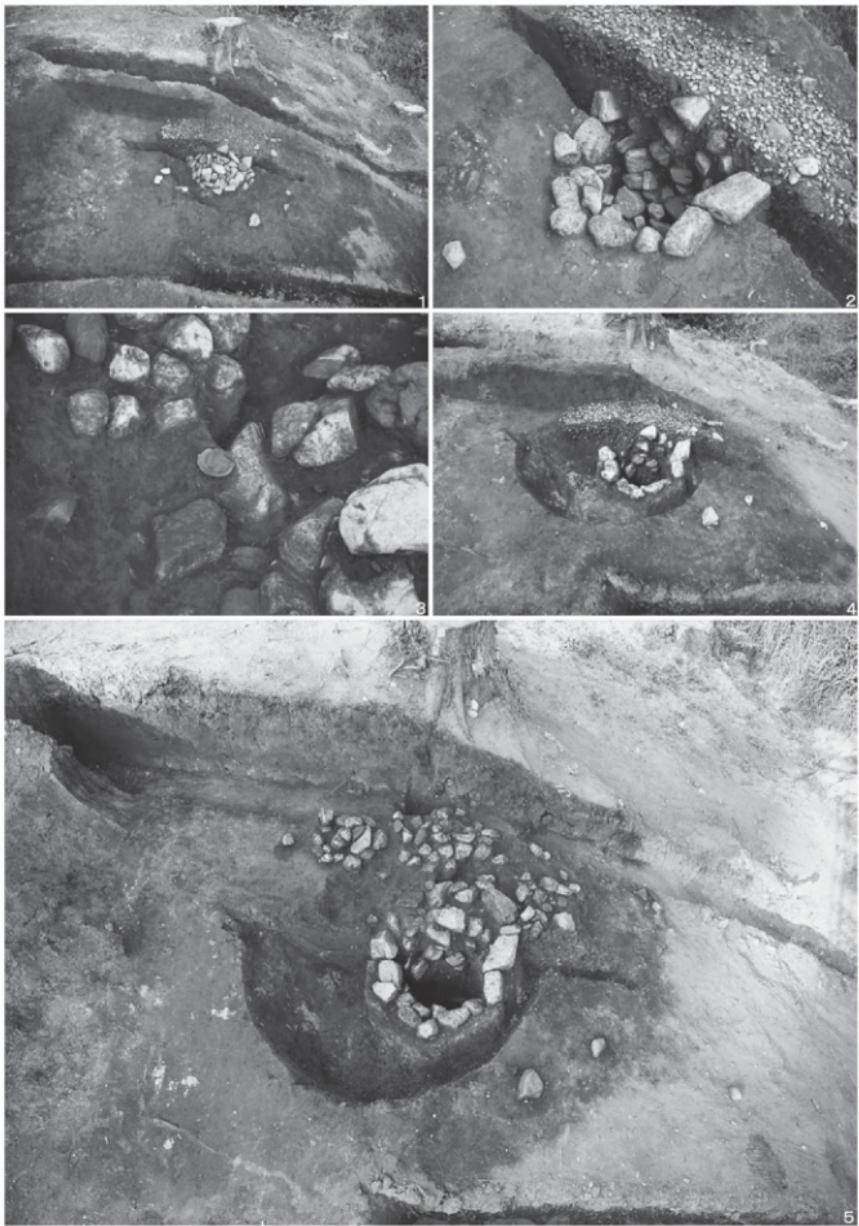
1. I区円礫層検出状況

2. I区円礫層遺物出土状況

4. 作業状況

3. I区円礫層遺物出土状況

5. 作業状況



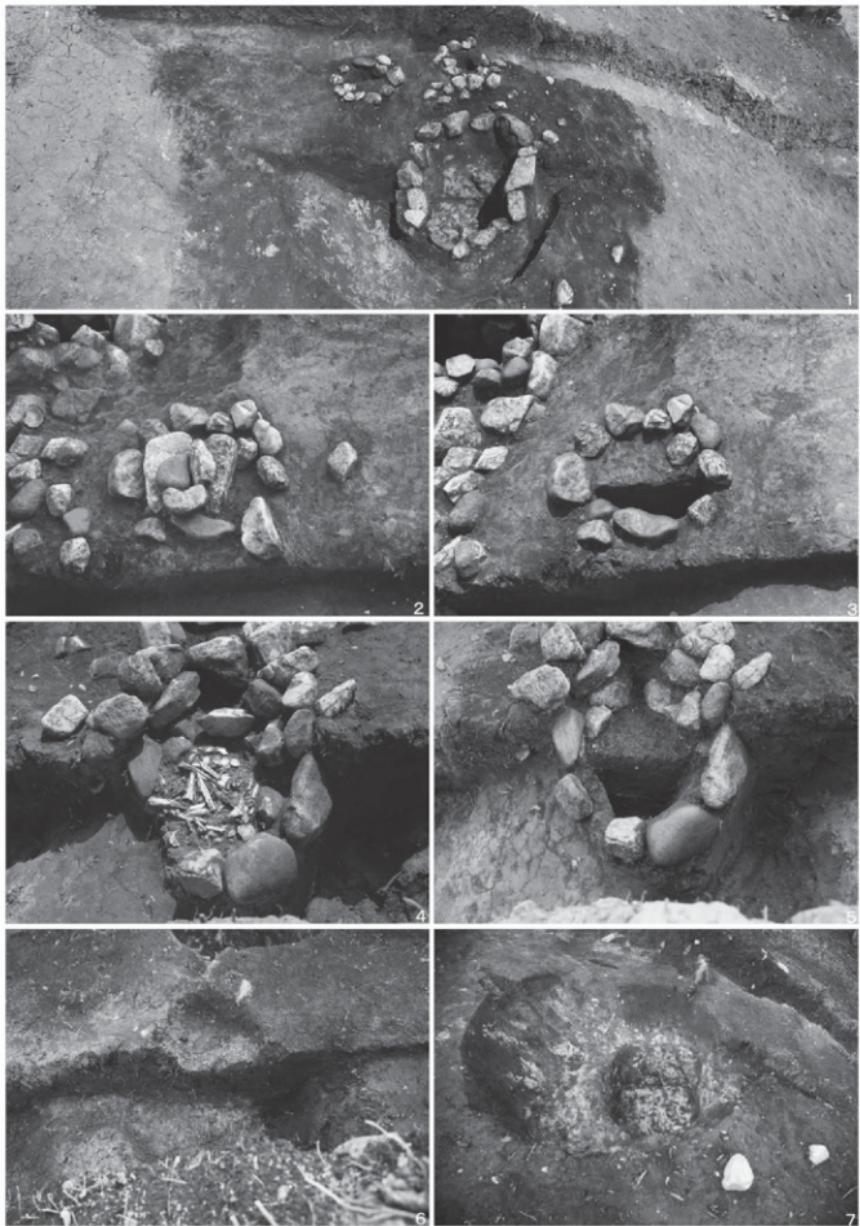
1. 1区SZ1円窓周半裁状況

3. 1区SZ1遺物出土状況

5. 1区SZ1～3検出状況

2. 1区SZ1半裁状況

4. 1区SZ1断面



1. 1区 SZ1～3 外縁石検出状況

2. 1区 SZ2 検出状況

4. 1区 SZ3 人骨出土状況

6. 1区 SZ3 完掘状況

3. 1区 SZ2 完掘状況

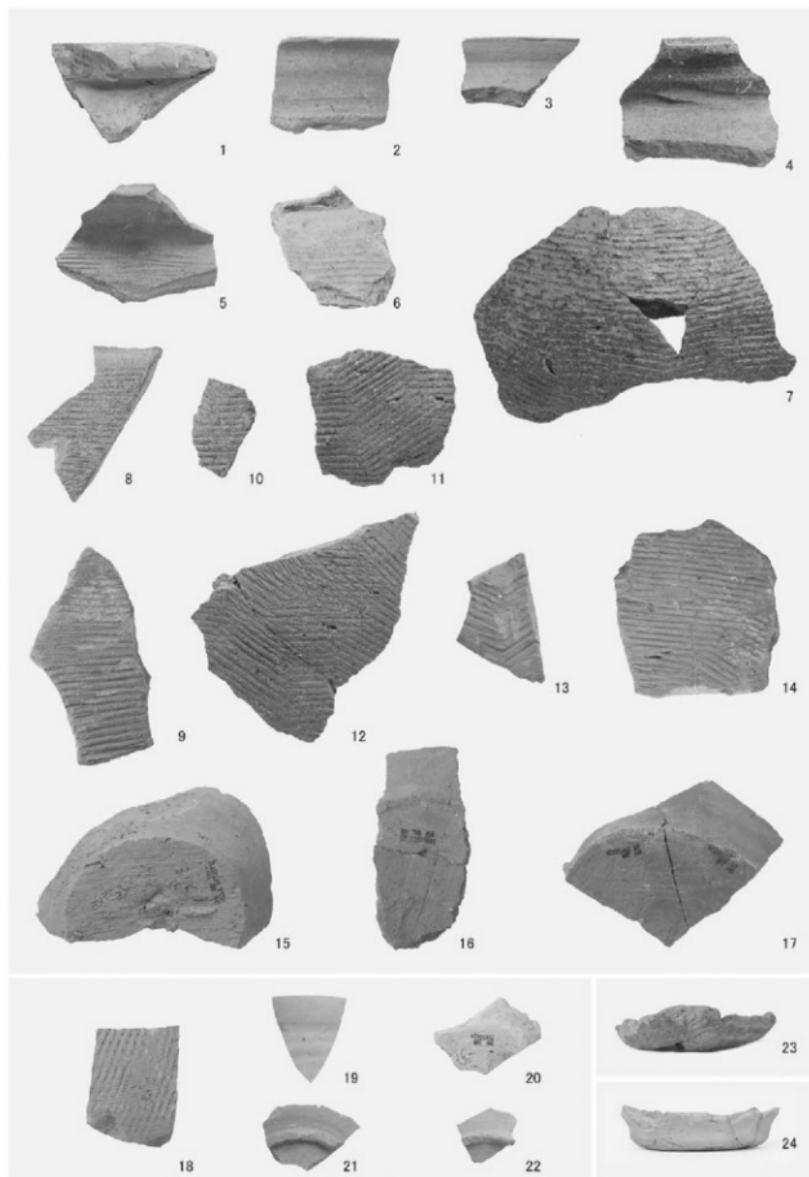
5. 1区 SZ3 断割状況

7. 1区 SZ1～3 完掘状況

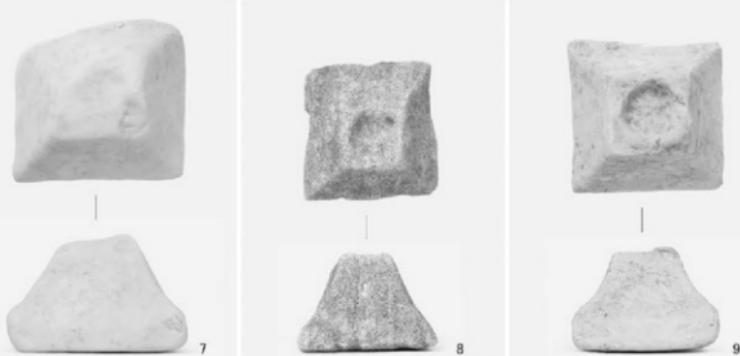
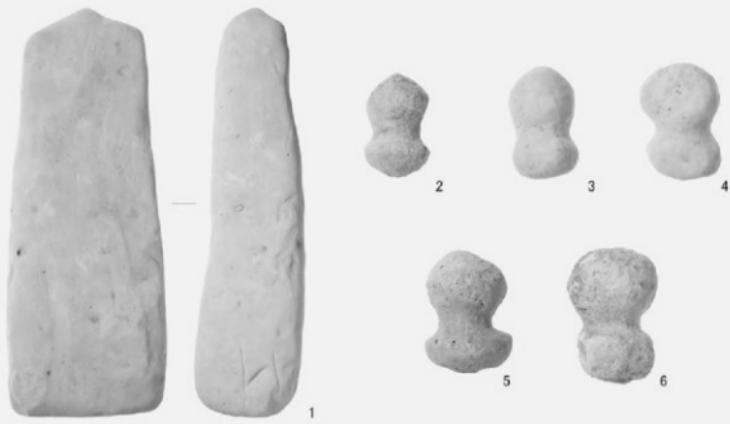


1. 2区 SX4 檢出状況
3. 2区 SX4 遺物出土状況（空風輪）
5. 2区 SX4 遺物出土状況（火・水・地輪）
7. 2区 SX4 遺物出土状況（空風輪）

2. 2区 SX4 遺物出土状況（火輪）
4. 2区 SX4 半裁状況
6. 2区 SX4 遺物出土状況（火輪）
8. 2区 SX4 断面



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



|



19



|



20



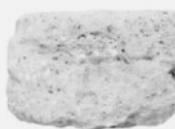
|



21



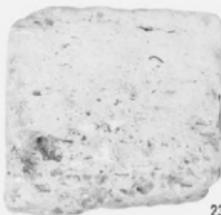
|



22



|



23

出土遺物 4

報 告 書 抄 錄

宇波ヨシノヤ中世墓群

能越自動車道七尾氷見道路整備事業に伴う発掘調査報告

平成26(2014)年3月20日発行

編集 水見市教育委員会

発行 氷見市教育委員会

〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号

Tel 0766-74-8215

印 刷 富士出版印刷株式会社